

2019年6月推薦図書

【スポーツ科学部 山崎 眞紀子先生】

『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』村上春樹著 新潮社 2005年

最近はノーベル文学賞候補者としてニュースで名を聞いている人も多いかもしれません。1979年に『風の歌を聴け』でスタイリッシュな文体でさっそうとデビューし、新たな文学シーンを展開した村上春樹も、いまや70歳。大学生にとってはもはや祖父の年代となりました。

有名だから読んでみたいけど性描写がいやらしくて受け入れられないとはよく耳にする批判です。性を描くのは、隠蔽されている根本的な人間の問題を描きたいから。文学にとって感情のゆらぎを描くことは欠かせないことです。古典的な言い回しですが、人間とは何かを考えるために文学があるとして、難しいことを難しく語るのではなく、SFやミステリーなどエンターテインメント的な装いで深い思考ができる小説を目指して書かれたのが本作です。

主人公を導くピンクの太った女の子や、クローゼットを開けると地下に続く川が流れている仕掛け、やみくろが闊歩する青山外苑前の地下道。何度読んでもそのたびに新しい発見のある面白い作品です。

『二百回忌』（『笙野頼子三冠小説集』所収）笙野頼子著 河出書房新社 2007年

「芥川賞」、「野間文芸賞」「三島由紀夫賞」の3冠に輝く作家の、とても面白い作品です。一筋縄ではいかない作家ですが、そこがまた魅力的。

タイトルからわかるように、本作は二百回忌法要が作品の主要な舞台となっています。ふつう、法事は一回忌、三回忌、七回忌…せいぜいが三十三回忌で終わりです。なんと本作では二百回忌。主催者は全財産を費やして行わなければなりません。二百年分の時間が現在の時間と接続され、死者がよみがえり、前後の文脈にお構いなく好き勝手に饒舌に語り始め、カーニバルのようです。200年の時空間は現実とは大いにずれて、ゆがんでいます。

法事への招待状は金の太陽に烏を黒く抜いた紋の入った真っ赤な封筒で届き、出席者は赤の式服、バッグも靴も靴下もすべて赤い色のものを身につけ、供されるのは赤唐辛子汁。すべてにおいて法事概念を壊し、その崩し具合が何とも面白いのです。もちろん、家父長制への批判が含まれています。

あたりまえと思われていることを疑うことから始めることが学問への第一歩。読んで、現実を壊す醍醐味を味わってください。

2010年に太宰治賞受賞作品『こちらあみ子』でデビューした作家の最新短編集です。私にとっては久々に夢中になった作家です。その逸材ぶりに、ある評論家は「こんな隠し玉があったのか！」と見事に表現していました。

2冊目の本は『あひる』。具合が悪くなったあひるが治療に何回か出て、戻ってくるたびに異なるあひるになっているような気がするのに、誰も気がつかない…。2016年に河合隼雄物語賞を受賞しました。

ある新興宗教に夢中になった親をもつ『星の子』は芥川賞候補作になり、また、筆力ある新人に送られる野間文芸新人賞を受賞しました。本作が4冊目の単行本となります。

私が特に好きな本作の短編作品は巻頭の「白いセーター」と、表題作になっている「父と私の桜尾通り商店街」です。皆とどこか違う独特の空気感をまとう主人公が勢ぞろいしています。

今村夏子の作品の魅力は、独特の「」にあり、金切り音が響き渡っているような効率性優先で勝ち組や負け組と仕訳されていく現代社会を、ほんの少し柔らかかなものに変えてくれている気がします。